WASON
HQ
1104
J94+
Oct. 1894
no. 402

明治十八年初刊

女學雜誌

毎週土曜日發兌

第四百二號

要目

孤女學院の女學
相見ると遠からん
戲曲 桂吾郎（完結）
傳道の道、千古明白
嬰兒の精神及其發達

明治二十七年十月二十日發兌

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

第四百二號目録

社説

相見ると遠からん

孤女學院の女學

傳道の方、千古明白なり

論説

嬰兒の精神及び其發達(完結)　竹内楠三

資質的教育

(い)自由なる實物の經驗

(ろ)精細なる觀察

(は)探究の快樂

(に)家庭の情

形式的教育

(い)自然界の法則

(ろ)人爲的法則

悲劇 魂迷、月中刄(阿波寺鳴門左衞門)

一名、桂吾具(完結)

女學雜誌改定の事

◎女學雜誌の編者は、思ひ立つ事ありて、大ひに餘暇を要めんと欲し、則はち、評論を女學雜誌に合併し、女學雜誌を毎月たゞ一回の發行に改ためたり。

◎毎月一回の女學雜誌は、月末に發行し、定價を十錢とし、一年分前金を一圓とすべし。

◎右改定の事は、來る二十七日に出版する第四百三號より實施すべし。編輯の趣き一生面を開かんと欲す。

◎女學雜誌の編者は、今后日本海外傳道會の爲めに盡力し、其の事業の端緒を啓くとに勉强せんとす。故に女學雜誌は、從來多年の事業の外に、新たに此事業に同情を寄せ、傳道會の爲めに盡力するとを期すべし。

◎海外傳道會の事たる、隆んに本誌上の知己に贊同を請はんと欲する所ろ也。たゞ寧むろに其景況を報告せんとを望むが故に、今ま特更に揚言せず。玆に只だ一事を告ぐ。此會、去七月七日に發起し、某々等五名を以て成立したるとを。

◎玆に特に「評論」の爲めに告ぐ。評論は、其第二十九號去る五日の發兌を以て休刊せり。最終の此號、千島シャシコタンに義死せる高橋傳五郎の日記文(渡島以來慘死の前日に至る迄)二十頁を全載し、些さか以て休刊の精神を壯んにす。知己希はくは一讀せよ。

女學雜誌

第四百二號

明治二十七年十月二十日發兌

社説

相見ると遠からん

復たび相見ずとて嗟くにはあらず、見ざることの長からんとて心切りに重し。これ迄は、毎週一度、必らず相見たるに、之よりは、手を接ゆることの極めて疎遠とならんとす。春は、衣を更えて花にむかひ、秋は蓐をかさねて夜の月をながめんが如く、一週こゝに、終れば則はち汝が來るべき日なりとして、つねに歡迎のもうけありしに、汝、之よりしては、吾を訪ふことの遠々しからんとは言ふ。土曜の夕べ、雁すら秋風に吹かれて來り、寒月だに檐端をうかゞはんものを、獨り窓下に坐して、舊交を憶ひ、友を念ひて思情のやみがたき時、汝尚ほ來らずと言ふ乎。

暫らく待て、吾友よ。いまし、恨意をつくすを許して、切めては、后に獨り苦しむことなからしめよ。丈夫、涙を別離に灑がず、起つて柳糸を結んで歌に舞樂せんは、他に見る人の多ければ也。吾等二人、河のほとりに立ちて、別意を語る。水の流れ盡きずして懷ひ止まらず、雲の飛散やまずして心息こふ能はず。暫らく手を握つて暫らく其行くをとゞむ。

嗚呼、苦しきは情けの閙雜かな。笑ふものは、笑つて其の淺く々しきを自白せよ。冷やかなるものは、冷却して其の木石に類することを自證せよ。人生もし情を輕んぜば、世は土塊となりし也、砂漠となりし也。

こゝに情を抑さえて、其の行くを送る。其の復たび會はんことをたのみて、暫らく歎きを殺す。往けよ、毎週女學雜誌。異日、また握手せん

凄々不レ似二向前聲一、滿座聞レ之皆掩レ泣、就レ中泣下誰最多、

江州司馬青衫濕。

孤女學院の女學

世に孤兒あるの由緣に至ては、素より痛惻の情に堪へず。然れども、仁人之を救濟し、父母に代つて其の生育に掛念するものあるに至りて、宛がら陽春爛熳の心地せらる。故に、孤兒院の能く成立するは、社會の譽れなり。其整備するは、仁心の進步なり。吾黨が、其發達に注意して深き同情を寄せんとするの主旨、此に淵源す。

然れども、東京市外王子瀧の川の頭りに建られたる孤女學院に對し、吾黨が生平最深の友情を寄せて數年渝はらざる所以のものは、單に其が建設の孤兒救養の爲めなるが故に非ず。眞とに、其の設立の主旨、敎育上の熱愛より發し、而も、其敎育たる、實に女子敎育に在るを以ての故なり。

然るに、世間往々孤女學院を目して一樣の孤兒院となし、其の設立の大趣旨を忘却する者尠からざるを見ては、遺憾太はだ深し。請ふ先づ其の名稱を一考せよ。單に孤兒と言はずして孤女と言ひ、而も、孤女院と稱せずして、斷然、孤女學院と名のる所以のものは、豈に明らかに其の精神を示すものにあらずや。明治二十五年一月、渠が其の設立主旨を世上に告白するや、文に云く、

……………仁人爲に孤兒院を設く、感謝せざる可けんや。然れども、啻に之を養育成長せしむるのみに止まらず、更に敎育上の期望を以て之を待し、其器に隨つて成べく完たく之を開發敎導せんことを欲するに於ては、孤兒を男女によりて分ち、其各途に於て之を尤とも適するの方向に誘導啓發することを最良なりと信ず。

吾等將來女子敎育に從事し、密かに一生を斯事に任せんことを期せり。久うして惟へらく、普通一般の女子敎育に至りては、世別に之に任ずるの君子あり。然れども、孤女の敎育に至りては、尙未だ專ぱら之に任ずるの人あるを聞かず、吾等不肖と雖ども先づ之に當らざる可らずと終に意を決し、敢て其使命を負ひぬ。

故に吾等は天父に祈り、其與へ玉ふものを以て衣食し、其の許し玉ふものを以て學びんとす。孤女は、其器に隨て、下婢となり、保姆となり、女工となり、產婆となり

看護婦となり、教師傳道師となり、以て其才の伸暢するまに〳〵、何等女流の率先者ともならんとす。而して、吾等もし其發育敎導の爲に終生の力を捧ぐるヿを得ば幸なり。

當時、女學雜誌は、驚喜して、此の一大佳報を世に傳告し、且つ、其の祝意を表して曰く、

……夏以來、立敎女學校は一層隆盛に趣むき、其敎授の懇なる、其團結の固き、其師弟間の美はしきヿ、女學校中、稀に見る所なり。然るに、大須賀君は此度の天災以來、大ひに覺醒する所あり、更に一層の熱情を以て往時を顧りみ、前行の倘ほ足らざるヿを悟るといへり。玆に於てか、晝夜靜念、默慮を重ね、或夜遂に猛然斷意して、女子敎育上更に一新事業に着手す可きヿに決せられたり。

其事業たる、海外に於ては餘り聞かざる所ろにして、吾人も未曾て企だて及ばざりし所のもの也。然れども、其事業幸はひにして行はれんには、眞誠の女子敎育初めて成就し、女學生眞誠の事業初めて自由となり、兼て、憫れむべき境界に墜落する幾多の女性を救濟する功德多からんとす。其事業とは他なし。女の孤兒を養成するヿ、即はち是也。

其孤女院なるものは、決して尋常の孤兒院にはあらず。純然たる一箇の女學校にして、たゞ孤女を專ぱらに敎育せんとするの主旨に出る耳。然れども、大須賀君は、平素ペスタロッヂを欽慕し、其敎育法の實施に志あり。故に今回の孤兒院には、純然たる博愛開發的の方法を用ひ孤女と共に日夜寢食して、遊優出入の内に自から之を敎養化成せんと欲すといへり(女學雜誌第二百九十四號社說中數節)

孤女學院建設の精神、實に斯の如し。三年間の辛酸、眞とに斯の邊にあり。而して將來多年の抱負は、正に此の一點に掛るヿを信認す。然るに、世上多數の屢ば之を誤まるヿあるのみならず、現に女子敎育に緣故ある諸人に至るまで、貌然として之を忘れ、今に於て之を見るヿの必らずしも温たかならざるあるは寧ろ痛心の事にあらずや。

吾黨が望を孤女學院に囑するは太はだ深長なり。此所により

他日驚ろく可き產物のあらんことを推察すると共に敎育學上の意義に於ける『日本女學』なるもの丶大發見は、必らずや其の試驗室の一つを此所に置かん也と確信す。回顧せよ、ペスタロッチは、一小學校の校長にあらずや、イベルダンは無名の片里にてありしならずや。而も、敎育學に大紀元を開き、歐洲思想の進向車を一轉せしめたる萠芽は、此の微々として覺束なき搖籃の內に於て發成せしにあらずや。靑史、白眼を以て看るべし、偉人、小見地の內に沒し易し。單に、形軀の大小厚薄によりて眞誠事業を評價せんとするは、迂にあらずして、何ぞ。吾黨は『日本女學』の硏修の爲に、孤女學院を太重すると共に、世上の往々之を冷視せんとするを見て、慨然たり。彼の白痴敎育に類するものは、現に孤女學院に於て試驗され、且つ成功したり。女子敎育に關する、種々の經驗は優に孤女學院に於て保藏せらる。苟しくも、女學の硏修に志あらんものは、孤女と云へる人々の敎育は、何如に多く敎育學上講究の便利を與ふるかを推知することを得べし。孤女學院は、即はち間斷なく之が爲めに苦辛しつゝある也。但だ、大須賀君の謙遜にして深奥なるや、未だ至らずとして俄かに其の敎育意見を發表せらるゝことなし。然れども、吾黨は終に之を與かり聞くの日あるべし。吾等女子敎育に同情あらんものは、此の大なる女學硏修者の爲めに助力する所なからずや。玆に世上同念の諸君に告ぐ。冀ふらくは、孤女學院を見る一層深長にして、且つ女子敎育の主旨に於て、之に助力せらるゝことの益々洪大ならんことを。赤情を披瀝し、所存を開盡して、世の同胞に告ぐ。

傳道の方、千古明白なり

傳道に二樣あり、國家に道を傳ふること一也。個人に道を傳ふること二也。

傳道者、個人に道を傳へ、個人の集會したる敎會を牧養するに、何の新奇なることあらんや。傳道者もし熱信忠誠ならば、個人及び敎會の奮はざる理あらんや。

國家に道を傳ふることは、大勢を靈導するの謂ひなり、其事時勢と相關す。故に傳道の方、亦た時勢と相涉らざるを得ず。其方を講ずるは、一種の宗敎的政治論なり。一種の社會的敎

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

育論なり。
奇しむべきは、二樣を混じて一とし、彼の奮はざるを以て、此の不振とし、彼に精はしからざるを以て、此の無知とし、尙ほ不明の事あるかの如く手を袖にして思案し、茫然として落意し、傳道今や行なはれずと歎ずるものあると是也。

大勢を動かすは、大觀を要す。敎會の連絡方を講ずるは自から別問題なり。何んぞ此等の事件によりて、個人の傳道と、一敎會の牧養とに疑懼すべきならんや。直接傳道の道、千古明白なり、只だ勉强して實行するにある耳。

◎戯曲「桂吾郞」の殘部、及び論說「嬰兒の精神其發達」の終篇を本號に揭了せんとて、以下、此の二文章の爲めに全餘白を埋め、殊に紙數二頁を加ふ。

◎この故に、左の諸文章の如き、既に編輯机上に存するに拘はらず、一切割愛して、次號に揭載すべし、

西洋女學の活用	我黨の基督
透谷集を讀む	婦人化粧の卷
全村是れ一學校	博愛社の主義
都の秋	可悲、今の女學生
樂翁公	朝鮮の基督敎徒

◎來る二十七日、月刊女學雜誌の初號を出版すべし。

論　說

嬰兒の精神及び其發達（承前）

竹　內　楠　三

第七　終結

余は本紙に於て嬰兒が精神の發達を畧述し、以て讀者の參考に供せんと企てしが、他事に妨げられ、大に遷延したるにより、未だ充分本題に關する條目を說き盡さゞる中に、計らずも本紙は今回を限りとして、其躰裁を一變し、月刊雜誌と改めらるゝことゝなれり。讀者に對し余が義務を盡す能はざりしは、實に遺憾とする所なれども、一まづ玆に本論の局を結ばざるを得ず。故に本論の終に臨み、是まで說明し來りたる所に基き、家庭敎育に關する卑見の一端を述べ、以て筆を措かんとす。讀者乞ふ之を諒せよ。

精細なる意義に於て敎育と云へば、既に兒童が發達して、自識を生じたる時期に及びて、敎育者が與ふる人爲的の經驗のみを指すものなりと雖ども、余が玆に敎育と云ふは、さる意義にあらずして、自識の有無に拘らず兒童が受くる一切の人爲的經驗、即ち一定の目的を以て、兒童に與へらるゝ經驗を指すものとす。夫れ嬰兒の身躰は種々なる刺戟の中に、圍まれおるものなれば、絕えず自然界の事物を經驗し得るものなりと雖ども、斯る自然の經驗は、悉く嬰兒の發達に利益あるにあらず、或は其刺戟の度、强きに過ぎて身躰の組織を害し、發育を妨ぐる如きものあり、或は其の經驗する事物の性質、善良ならずして、知識の開發を妨げ、德性の修養を害する如きものあり。故に自然の經驗にのみ放任し置くときは、好結果を見る能はず。又た假ひ甚だしき害を及ぼさゞるにもあれ、自然の經驗のみを待ちおりては迅速なる發達を見ること難きものなれば、人爲を以て或は自然に來る處の刺戟を制減するとか、或は自然の經驗の充分ならざる所を補ふとかして、成るべく迅速に完全なる身心の發達を遂げしめざるべからず。之れ嬰兒期に於て既に敎育の缺くべからざる所以なり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

一方より見るときは吾人の身體は腦中に存する種々の思想、感情、慾望等を外界に現はし、以て精神の願望を達する爲めの機關たるに過ぎずと雖ども、又た他の一方より考察するときは、吾人の精神は身體組織を基礎として發動するものにして、精神の健不健、活潑不活潑などは、身體の生理的狀態に伴ふものたるや明かなり。されば嬰兒の精神的發達を遂げしむるには、之れに先て健全にして活潑なる身體を作らざるべからず。世に往々嬰兒の精神的發達に專ら意を用ひて、身體の發達を顧みず、營養、運動、睡眠などを忽になす人あるを見る。思はざるの甚だしきものと云ふべし。之れ蓋し生理學、心理學、等の知識に乏しきを以て、身體と精神とは各々別立のものが互に和合しおるものゝ如く思惟するによるならん。又た時としてはその身體甚だ軟弱なるに、その精神甚だ怜悧活潑なる如きものなきにあらずと雖ども、之れ他に事情ありて一時然るものにして、永續を期し難く、また例ひ精神の發達他人に秀づるとするも、若し身體健全ならざるときは、その思想、感情を實行する能はずして、單に病的思想家として生涯を終へざるべからざるに至らん。尙ほ一歩進んで考ふるときは、吾人が生存し活動し得るは其極身體の健全なるに基くものにて、例ひ如何に高尙なる品位を有する人となるも、之れが爲め身體を害し非命に死せざるを得ざるに至らば、實に悲むべきにあらずや。兒童が身體の不健全が將來の心情の發達に及ぼす影響に付き、左に二三の述ぶる所あらんとす。

(い)身體の不健全は絕えず一種の不快を感ぜしむるものなり。之れ體內に起る生理的變化が其の局部に分布せる感神經の末端を刺戟し、これ等の刺戟身體の諸部より湊合して、不快なる生理的感覺となりて識に現はるものなり。體外より來る苦痛は之を避くるに容易なりと雖へども、生理的不快に至りては之を避くること難くして、絕えず何となく快らぬ感情はその腦中に滿ちおるものなるを以て、外界の事物を知覺するに憂鬱なる色眼鏡を通過して知覺するものとす。故に世界は他の人と比較して何となく憂苦なるものゝ如く見え、漸次厭世的の性質を養ふに至る。夫れ人の外界を知覺するや、自己の感情を裝はせて見るものなり。故に生理的感覺の如何は世界に對する感想の根本となるものと云ふも不可なきが如し。

(ろ)次に身體の不健全は自制力の上に大なる關係を有するものなり。身體の强健なる人にありては種々の烈しき感動を受くるも、夫れが爲め容易に動かさるゝことなく、先づ各種の感情を互に比較し思慮して、自制的活動をなすものなりと雖ども、身體の病弱なるものにありて斯ることに堪へず。苦にもあれ、樂にもあれ、少しく烈しき感動あるときは、忽ち之れに動かされて、或は怒り或は笑ひ、或は悲しみ或は喜び、其心情の變化常なくして殆と狂せるものゝ如し。斯る自制力に乏しき人は怒るべからざるに怒り、笑ふべからざるに笑ひなどして、社交上大に他人の感情を害すること少からず。又たその亂暴なる行爲の結果として計らざる苦難を受けざる可からざることあり。之れ吾人が病身なる兒童に於て常に目擊する所なり。斯る有樣なるを以て將來德性の修養に害ある推して知るべきなり。

(は)膽力、勇氣、活潑、耐忍などの性質と身體の健全とは密着なる關係を有するものゝ如し。强健なる兒童は常に活潑にして、少しの時間と雖ども靜止することを好まず、絕えず何事をかなさんと勉むるものなり。而して能く勞動に耐え、又た能く困難に打ち勝ち以て成効を見、自己の能力を表はすことを無上の快樂となすものなり。故に斯る兒童にありては大膽にして勇氣あり、困難に逢遇することを少しも恐れざるなり。之に反して病弱なる兒童にありては、常に活動することを好まず、躊々として靜止し、若し少しの苦難に際するときは之れに耐ゆる能はずして泣くことゝ屢々なり。さればにや常に怯懦にして勇氣なく、困難と戰て勝利を見んとする希望の如きは毫頭見る能はざるなり。

(に)精密なる思想、公平なる判斷は常に身體の健全と平行するものゝ如し。既に述へたる如く身體病弱にして些少の感動に逢ふも直に動かされ易き性質の人は、その腦中の變動甚だしくして、恰かも怒濤激浪を見る如き有樣なれば、沈思靜想して精密なる觀念を得るに適せざるなり。加之耐忍力に乏しく少しの困難にも打勝つこと能はざるものなれば、注意を一點に集めて精密なる推理をなす如きとは到底できざるべし。斯る實例は身體の薄弱なる學生に於て吾人の常に見る所なり、故に身體薄弱なる少年は決して精密なる思想、公平なる判斷に富む人とはなる能はざるべし。

以上は身體不健全と精神との關係の尤も著しきものゝ數例に過ぎざれども、精密に之を觀察するときは、尙ほ驚く可き關係の多く存することを、何人も發見す

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

るならん。而して身躰の發達に、最も注意すべきは、嬰兒期にあるものにして、若し此時に於て其營養、運動、睡眠など充分ならず、又た屢々健康を害せしむる如きことあるときは、大にその發達を妨げ、且つ將來に惡結果を殘して、遂に薄弱なる兒童となし、最も精神上の發達をなすべき時期に至るも、充分なる教育を受くるに耐えざる如きものとなるならん。實に警戒すべきことならずや。されば營養、運動、睡眠の三者は嬰兒期に於て特に注意して其度を得せしめざるべからず。

次に精神上の教育に關し、少しく述ぶべし。既に前回(第三百九十四號)「注意」の部に於て說明したる如く、嬰兒に始めて自制的注意の現ると同時に、人爲を以て精神の開發を助くることは大になし得らるべし。即ち此時期までは單に外部より來る刺戟を受け得るのみに止まりたれども、自制的注意の發生するに及びては唯だ刺戟を、その來るまゝに受けおるに止まらずして、自ら進で或る刺戟を受けんとするに至るものなり。譬へば他人が物を與ふるを待ちて、始めて口を開き之を受くるに止まらずして、自ら手を伸して物を取り、之を口に入れんとする能力を得たるもの丶如し。故に頻りに周圍のものを觀察して觀念を得んと勉むるものなり。之れ教育上有效なる期となれる所以なり。然れども玆に最も注意せざるべからざることは、種々雜多なるものを過度に腦中に押込みて、軟弱なる組織を疲勞せしめ、發達を害せざるやう愼むことなり。

精神の教育を分ちて便宜の爲め二ツとなす。一は資質的material教育にして、他は形式的formal教育なり。資質的教育とは如何なるものを云ふか。精神活動、或は精神的生活の根本となり、資質となるべき感覺を得ることなり。形式的教育とは何を云ふか。精神活動の資質たる感覺の結合法を定むることなり。夫れ吾人の精神は外界の經驗より來る所の種々の感覺が其元素となりて、互の關係に基き或は結合し或は分離するものに外ならず。而して此の如く結合し或は分離する形狀は、通常稱して知力と呼ぶ現象なり。然るに精神上の教育を分ちて知育、德育、美育などゝなすものあり、又た知育、情育、意育などゝなすものあり、而して此等の分類法は殆ど一般に用ひられおる者の如しと雖ども、能く精神の性質を研究するときは、是等の區分法は未だ適當なるものと云ふべからず。余の見る所を以てすれば、以上舉げたる二類に區別をなす方一層適當なるもの丶如し。之れ精神現象の性質に基くものにして、應用の點より見るも他の區分法に勝りて便利なるべしと信ず。されど斯る區分法の優劣或は其理由などに關しては、今玆に論ずる限りにあらざれば、之より先づ資質的教育に關し家庭に於て注意すべき點を少しく述べ、次に形式的教育のことに及ばんとす。

(一)資質的教育――余が既に本論の第一、精神の單元(第三百七十六號)及び第四、感應の分化(第三百八十號)の兩篇に於て說明したる如く、精神は凡て微小なる感應力の集合より成るものにして、此の感應力は神經の組織內に潛伏せる位置のエネルギーと外界の刺戟とより生ずるものなり。されば吾人の精神現象たる所謂觀念或は感情の如きものは凡て外界の事物を經驗するより起るものと謂はざるべからず。而して嬰兒期に於ける教育は之れが基礎を與ふるものとも云ふべし。資質的教育に關して注意すべき點二三を左に記せん。

(い)自由なる實物の經驗――此時期に於て尤も必要なることは、自由に實物を經驗せしめ、而して其物が五官に如何なる感覺を與ふるかを知らしむるにあり。之が材料となるものは、嬰兒自身の運動を始めとし、周圍に存する事々物々、悉くその材料となるなり。故に育兒の任にあるものは、能く注意して、有害或は有毒なるものを嬰兒の眼にふるゝ所より避け、而して種々の無害有益なる品を與へ、自由自隨に之れが實驗をなさしむべし。之れ嬰兒にとりては實に斬新に且つ興味あることにして、且つ將來廣大なる知識を得る根源たるものなり。然るに嬰兒の經驗の範圍を制限して、大に知識の源を減ずる如きこと、吾人の屢々見る所なり。母たるもの能く愼まざるべからず。

(ろ)精細なる觀察――事物を知覺するに當り、精細なると然らざるとは、その人の思想上に著しき關係を有することたるや疑なし。吾人は小學校にある兒童に於て讀書、作文の時間などに、その觀察の精密なると、否とに甚だしき、差異あるを見ること屢々なり。幼少の時の觀察は、將來の知識に重大なる關係を有するものなれば、嬰兒期より一事一物を經驗するにも、能く注意して精密に觀察する習慣を養はざるべからず。然るに嬰兒は精密に觀察せんとする場合に於て、反て母たるもの之を妨ぐる如きこと、蓋し少からず、實に憂ふべきことならずや。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

(は)探究の快樂――嬰兒は好奇心に富むものなれば、斬新なる事物に逢ふときは、そのもの丶性質をたしかめんことを勉むるものなり。例へば、凡て蓋を以て掩はれたる如きものあれば、之を開き見ざれば滿足する能はざるものなり。斯る傾向は、將來知識を增進せしむるに、最も必要なる動機となるものなれば、探究を以て、無上の快樂とする習慣を、益々發達せしむるを要す。然るに反て之を妨害する如きことはあらざるか。

(に)家庭の情――家庭の情とは、慈母を始めとなし、父及び兄姉などに對する感情を云ふ。人をして社交的たらしむる源は、家庭にあり。家庭に於て味ふ所の快樂は、他の快樂の標準ともなり、又た將來の快樂を想像する、基礎ともなるものなり。故に家庭に於て最も注意すべきことは、兒童をして父母兄姉は實に「イ丶」ものなりとの感情を、深く印象せしめざるべからず。而して「スウイート、ホーム」の觀念は、何時も其腦裏を去らざるやうせざるべからず。孝は德の本なりとは、孝經に教ゆる所なるが、之れ實に然ることなるべし。されど眞の孝心は、何となく父母は「イ丶」ものなりとの情が、基とならざるべからず。若し然らずして、孝ならしめんとするは、恰かも根なき樹を生長せしめんとするが如し。

余は固く信ず、家庭の快樂は幸福の大源、道德の根本なることを。されば猥りに其兒童を譴責し、之を恐怖して以て父母の威を示す如き處置は、實に惡むべきこと丶謂はざるべからず。斯る父母にして命令的に、其子の孝心を求めんとするも、豈に得べけんや。

(二)形式的教育――感覺の結合するに二種の形狀あることは、既に第四回（感應の分化）の部に於て說きたる所なり。二種の形狀とは即ち、(一)類に基きて結合するものと、(二)時に基きて結合するものとを云ふなり。然り而して、吾人が外界の事物を經驗するや、得る所の觀念は、決して孤立して腦中に入るにあらず、必ず二者の中、何れかの形狀に於て、結合して識內に入るものとす。故に再び現出するときも亦た必ず、何れかの關係により、他の觀念と相連結して現はるものとす。而して或觀念と或觀念とが、吾人の經驗に於て、何時も結合するときは、所謂不變の理とか、天則とか、自然法とか、道とか名けらるものなり。之れ外界の事物が、變化する形狀たるなり。又た之れと同じく、吾人の心情界も、觀念の結合法に基きて變化するものにして、決して此法則以外に活動することなし。形式的教育法は、此法則に基き、心情界の組織を能く整理する方法なり。

(い)自然界の法則――兒童をして極めて幼少の時より、自然界を經驗せしめ、自ら其間に存する法則を發見し得るやう、適當の境遇を與へざるべからず。斯くして自然界の法則を發見し得るときは、兒童は之を標準として自己の行爲を自制し、或は自然物を利用して、自己の利益を計り得るに至るものなり。例へば、兒童は夙に火の性質を知るを以て、その危害を避け、或は重力の法則を幾分か理解するを以て、之を利用して木片を積み立つることを得るなり。兒童をして、樂みて天然の法則を發見せしむるに適當なる境遇を與ふるは、此教育の目的なり。

(ろ)人爲的法則――吾人の德行或は犯罪の如きものも、悉く觀念結合の法則に基くものとす。故によく此法則を適用して、教育を施すときは、左程德育の困難を感ずることなかるべしと信ず。夫れ玆に甲、乙の二個の感情ありとせんに、互に競爭するときは、乙の方甲より强力なるを以て、甲に勝つと假定すべし。然るに甲が勝てば、德行となるも、乙が勝てば罪惡なりとせんか、斯る場合には丙てふ感情を甲と結合せしめて、二者の合力により乙に打勝つものなり。此方法によりて兒童の品性を養ふときは、實に好結果あるは疑なし。此方法により今日の社會に於て善と認められおる習慣或は將來の社會に、必要なる習慣を究めて、幼少の時より漸次與ふるときは、遂に習ひ性となりて、自ら社會の善とする所を好み、惡とする所を惡み、所謂心の欲する所に從て、矩をこえざる人となり得べし。

以上述ぶる所は、家庭教育に關する卑見の大要を、秩序的に述べたるものにあらず。たゞその注意すべき問題のみにつき、極めて簡單に說明したるものに過ぎず。要するに、嬰兒期に於ては、余り人爲的に制裁するは、害ありて益なければ、寧ろ自然の發達を妨げぬやう、注意するにあり。　（完結）

◎本論は、第三百七十六號、第三百七十八號、第三百八十號、第三百八十三號、第三百八十九號、第三百九十四號、及び本號の七回に涉り二十六頁餘あり、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

雪子。うれしくも何んとも無い。

お鶴。だって、宮城さんのお嫁におなんなさるは、おうれしうは御坐りませぬか。

雪子。あゝ、けがらはしい！そっちい行っておくれ。

お鶴。まア、そんなにおゝこんなさらんでも。いま、旦那やおかみさんと一所に、三人で御酒をあがって御坐ります。〔はひる〕

浄瑠理。「あと見送くってたゞひとり、むね一杯のかなしみをこらへかねてやはら／＼なみだ。ぬぐふにいとまあら磯のいはにくだけておもひ入る。折から、奥より母お鶴、いづるすがたもよそ／＼しく。

お鶴。お雪、まだ寐ないの？どうして泣いたり？――おまいは、まア、なぜおやのいふことを聽かぬ、え、おとッさんがあのくらゐすゝめるのに？おまいの不爲めならばこそ、誰れも、自分の子ののち／＼をおもはぬものァあれャァしないよ。世間に澤山をとこはあっても、浪子の見たやうないくぢ無しもあるだらう？それに、おまい、宮城さんのやうなおかたは、お役といひ、おなさけといひ、どこにいひ分があらうぞい？人にあやかりものといはれたけれャァ、おまい、あゝいふおかたのお嫁だよ。――えゝ、雪子、どうだい？何にも耻づかしくァないやね。

浄瑠理。「どうじゃ／＼と母おやの一杯氣げんにゆすらるゝ、むすめが無念さ、うらめしさ。

雪子。〔そでなくひ切りつゝ〕わたしがそんなにお邪魔なら…………

お鶴。何んだと？

雪子。いッそ、死にたう御坐んす。

お鶴。お死に！死んでしまいなよ！

雪子。はあゝ！

浄瑠理。「わッと泣き伏す雪子をば、にが／＼しくうちまもり。

お鶴。おまいは、いよ／＼、わたしのいふことを聽かんね？――これから、もう、一切、おまいの身のうへにはかまってやらんよ、勝手におしな。おまいの爲めをおもってやるのに。――これ、雪、いよ／＼だね？――もう知らん。さア、早やく、あの浪子を追ひ出して、きたないあとを掃除おし。――よし／＼、をとこにいひつけて、すぐに追ひ出すから。

浄瑠理。「立たんとすれば、すがりつき。

雪子。すれャ、すれャあんまりな。

お鶴。えゝ、知らん、不孝もの！あのかったいのかさうらみ、早やく追ひ出して、掃除せい！

雪子。それでもといふて、まア？

お鶴。えゝ、追ひ出せといふに！

雪子。はあゝ！

お鶴。泣くくらゐならさ、おやのいふことを聽くかえ？

浄瑠理。「また居なほるうしろより、ふすまをあけて父繁太郎、聞き居たりけん、いで來たり。

繁太。お鶴、もうせめてくれな。これほどいふても聽かぬのは、何にか深かい子細があろ。――雪子、さア、いまは、もう、何にもかくさず、そちがこゝろをうちあけてくれ。父母のまへで、はゞかるにはおよばん。

浄瑠理。「さすがてゝ御のうちとけて、慈悲あること葉に

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

なみだをぬぐひ。

雪子。お二人さまの仰せにそむき、わたしが氣まゝを申し升のも、これにはわけのあること。そんなら、どうぞ、お聽きなさってくださりませ。まだお話し申しませねど、實は、わたしは、行すゑ一所になりたき人がお坐りまする。

繁太。むゝ！

雪子。宮城さまはそのおかたを、わたしと仲へだてん爲め、お役とはいへ、わざ〳〵遠いフランスへ送くられ………

淨瑠璃。「こひしきそらは千萬里、また逢ふまでのかたみとて、ゆび輪一とつをおもひ出の、ゆめにそひ寐のおすがたも、さめてはいつか歸へりこん？

いまにもあやういあの涙子さんひとりが、たゞけふあすの友だち。桂さまは御坐っても、いまゝでこちらがうそついて居たやうで、もう、ふたりはかほがあはされませぬわいな。

淨瑠璃。「わッと身を投げなきさけぶ、むすめをちゝはいだきあげ。

繁太。雪子、ゆるしてくれ〳〵。早やくから知って居ったら、こんなとはいはなかったぞ。

お鶴。わるかった、わたしが。どうぞ、うらんでおくれなよ。

〔本釣鐘。椽の下より、白刃の賊二人。下手障子を蹴やぶって、おどり入る。〕

賊一。これ、宮城にのせられた馬鹿夫婦！かね出せ。

お鶴。すれゃ、おまいはどろ棒？

賊二。だまれ、そんな！

一。〔繁太郎の目さきへ刄をつき出す。〕これだぞ。だまってろ。

二。さァ、いのちが惜しけれゃ、しばられてしまへ。

〔一はそのまゝ立って居り、二はお鶴をしばる。この時、一のかぶりものはづれる、雪子見てびっくり。〕

雪子。あなたは山口！

山口。だまれ。—勘太、早やくしばってしまへ。

勘太。これ、どこ行く？

〔勘太、にげやうとする雪子のくび筋をつかんで、引きもどす。〕

雪子。あれえい！

勘太。だまってろ！

山口。〔雪子に刄をつき出す。〕いのちが惜しけれゃァ、しづかになわにかゝれ。

〔奥より、宮城。〕

宮城。これゃ、山口！卑恐な、待て。

〔宮城、二賊を追ふて下手へは入る。〕

雪子。あゝ、こわう御坐んしたなァ？

お鶴。まァ、あやういいのちも助かり、ぬすまれたものもなくってすんだ。—しかし、しばられて、手がいたい。

雪子。あゝ、わたしがといてあげませう。—あまりこわくって、手がぶる〳〵ふるへて。〔といてしまふ。〕

お鶴。あゝ、助すかった〳〵。

〔奥よりお鍋。〕

雪子。宮城さんのおかげで。—まァ、山口さんがどろ棒？

お鍋。雪子さん、大變で御坐ります、涙子さんが死んでし

まって！

雪、鶴。えゝ？

お鍋。何んだか、苦るしいこゑをしたとおもったら。

雪子。かなしいとばかり！〔立つ〕

お鶴。早やく行って御覧。

〔雪子お鍋入る。下手より宮城、出て來がしらに人だまを飛ばす。〕

宮城。やゝ、しまった。とう〳〵にがした。

お鶴。しかし、おかげて助すかりました。

繁太。それどころか？ちょっと行って見てくだされ、浪子が死んだから。

宮城。死にました？——これさ、もう、病院にも居られぬわい。

〔は入る。〕

お鶴。何んだか、むねが落ちつかぬ。

繁太。おれも手あしがちゞかんで、何んだかなわに〔木の頭〕かゝって居るやうだわい。〔幕。ちき引ッ返へす。〕

〇返へし。

（一）暗夜大淨寺途中の塲。

〔本舞臺、いち面くろ幕。幕明くと、ちき、下手より桂民子一生懸命にいで來たる。〕

民。あゝ、心配でならぬ吾良さまの身のうへ！たゞかたきさへお取りあそばせば、父うへのおしかりもなほり、うちへもどってくださるもの。このごろは、母さまがお寺へ行かしてくださらぬ故、これもいまゝでおすゝめ申しかねた。うらめしい母さま！「かたきを討てぬやうなものにはそはせぬ」と、毎日ふたりの御意見も、このむねには針をさゝれるやうに苦るしいのに、吾良さまとしたとが何んともおもはぬかいなァ？それに、宮城は病院をのいてしまふたとのこと。ぐづ〳〵して居れば、またどこへ行ってしまふか知れぬ。早やくかたきお取りあそばせば、もとのやうにおかほも見て居られやうもの。父うへさまや母さまのお目をしのんで來たのも、こればッかりが氣がゝりゆゑ。早やく行かうとするほど、なほあしがすゝまぬ、えゝ、しん氣な吾良さまじゃなァ！

〔民子上手へは入る、しらせにてちき幕切って落とす。〕

（二）おなじく書齋の塲。

〔本舞臺、上手より寺の一隅室、高き椽がはたまはし。下手あがり段、手洗鉢、芭蕉、そで垣。坐敷、床の間に一劔、桂机上、臺ランプのもさで、おも入れ。〕

桂。世のわずらひさけん爲め、こゝに來たがけふあすと、もつれ增さるわがむね。夜はにさめて居るのも、眞にさめては居るまい。さめぬゆめのこの世界、しかし、また、一とこゑに、よろづ神のおどろき呼び起こすか知れまい。あゝ！考がへて見るほど、見るほどわからずなる。たゞ、夜ふけるばかり。若しもこれで死ぬなら、何にが何にかわからぬ。

〔おも入れ。奥より、手燭を以って小僧誘善。〕

誘善。桂さん！

桂。おゝ、誘善さん、いまごろどうしたの？どうして、そん

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

なにふるへて？

誘善。わたしゃ幽靈見ました！

桂。幽靈を？

誘善。えゝ。

桂。そんなものゝ、おまい、あるものか、馬鹿な？

誘善。それでも、いま、わたしがそこの手洗場出ますと、このあかりが暗らうてよくわかりませんけれど、芭蕉のしたぐらゐで、志ろいものがしょんぼりと立って居ました。どこやら、をんなのかほのくづれて、—わたしゃほんとにこわくって！

桂。なァに、おまい、何にかほかのもの見て、さうおもったのだ。

誘善。それでも、わたしゃほんとだもの。

桂。それがこわいとなら、このおてらに居られんよ。うらはいち面お墓で、何にが出るか知れない。卑恐なとはいはないで、早やく寐るがいゝだらう、幽靈なぞ無いもんだから。

誘善。それがほんと？

桂。うゝほんと。

誘善。〔小くびをかたげる。〕でも、何んだかこわくって、わたしゃほんとに見たもの。

桂。なァに、おまいが見たとおもったのだ。

誘善。それでも、和尚さんがお好きの芭蕉のしたであったもの。

桂。それさァ、もう、どこでもいゝから、早やくおやすみ。

誘善。そんなら、寐ませうか？

桂。うゝそれがいゝ。

誘善。何んだかこわくって。—まァ、あなたもおやすみなさい。

〔誘善は入る。桂、矢張りおも入れ。本釣鐘。耳をそばだてるこなし。〕

桂。何にかあしをとがする。はて、このまっ暗らの夜に？

〔立ちあがって障子をあけ、すかし見るこなし。ごろ〳〵。涙子の靈、この世を去った時のすがた。〕

やァ！なんぢは何ものだ？月むなしきこの深夜、何にをたより來たのだ。あたりまっくら氣せき寥、くさ木寐むる全世界、うしみつどきかすめて、何ゆゑまよい來たか？われを遠き魔界へ引きずり込む大たくみ、看やぶられた變げか。但しは、深かきひかりかげにつゝみかくして、わがうたがひ解く爲め、ものに化けて來たのか？くづれたそのかほっつら、—これさ、なんぢ、冥途のつかひ！身をどうするつもりで志のび來たか、答たへい。これさ、なんぢ、こたへて見ろ！—こたへぬか？これさ、答たへ！われをどうするつもりか、こたへて見ろ！—いはぬか？これさ、こたへて見せよ！

靈。うらめしや、桂さま。上田涙子、幽靈で御坐ります。

桂。やゝ、涙子！死んで、まよふたか！〔椽がはへすゝみ出る。〕

靈。うらめしや、桂さま。わたしゃ死んでも、まよふて居りますわいなァ。

桂。涙子、よくいった。われもまよふは、この世も未來もか

靈。はらぬ。さァ、一所につれて行け。
かたじけないお言葉、ほかにわたしゃ怨みは御坐りませぬわいなァ。しかし、わたしゃ、血のすぢけがれましたからだて、不甲斐は不甲斐な身とさとッてもこゝろよわく、むねのゝきば破ぶりて、しのぶ亂だるわがこひ。身のほどをばわすれて、あなたを兄うへとおしたひ申したわたしは、あのお墓できびしうくやみましたそのとき、ぢきおわび申せばよかッたものを。をんなの念、うまれ升る時より、うらみ深かきものゆゑ、いふべきともいはれず、隱くしましたそのつみ、どうぞ、お許るしなされて、たゞ一とこと、桂さま、お聽なされてくださりませ。—なさけ無いこのなり！〔身づからを見まはす。〕

桂。かみあらば、ま守り給へ！

靈。すれャ、桂さま、決しておそれなさらんでも。わたしがこのすがたで死にましたは、もとより血すぢのやまひなれど、ひとり無事であッたもの、毒以ッてだまされましたこのくやしさ、うらめしい！かたきはまたあなたと一とつなるあの宮城。

桂。えゝッ！

靈。あの宮城がわたしの、また、かたきで御坐ります。人のみちも知らずに、たび／＼くどきに來たすゑ、わたしにくすりやらうと、山口に持たせて來ました。これがこの身をくづすたくみとは、あとでわかりましたが、宮城はいま湓屋でよくもてなすゆゑ。このけがれたわたしが何んぼしたしうまじはッて、いまはのきはまで離れぬ雪子さんにも、どうして、このとばかりははなされませう？この無念！どうぞ、あなたが晴らしてくださりませ。かたきはあなたと一とつの宮城で御坐りまする。桂さま、お先き／＼。

〔大ごろ／＼、幽靈消ゆ。〕

桂。はあ！ゆめか？うつゝか？—ばけもの、どこ行ッた？ゆめなら、早やくさめよ。うつゝなら、何んである？われはすでに魔界に落ち入ッたか？なほ煩惱天地はなれず、むねのまよひ見たのか？—「かたきはあなたと一とつの宮城」と？ようだ。

〔急におもひつきし如く、障子ぴッしゃり。劍を取り、室の眞中に來たり、立ちながら之を拔いて見つめて、氣の亂だるゝこなし。そで垣のかげより、民子、段をあがり、椽のうへ障子ちかう、トッさこゑを飲み込むこなし。〕

桂。いかにもするどい！なんぢ、おやのかたみ。このはでよくかたきを斬るなら、わがこゝろのうたがひ、先づ根からかう斬ッて見ろ。〔腹斬るまね。〕は、、、、！ばけもの、どこ行ッた。斬り殺ろそか！—あゝ、一寸先きまッ暗のやみ深かく、わが父うへ、魔界のみち迷ふらん。—あなたもうらみを以ッて、惡魔の爲めおなやみなされて御坐りませぬか？—はゝァ！化けもの、どこ行ッた？やァ、宮城、出てこい。ちゝのかたき、殺ろすぞ！

淨瑠理。「つるぎきッぱり身をかため、またもながむるきッさきのいきもこほれと靜づまりし、そとに民子は堪

へかねて、もらせしこゑに耳そば立て。

桂。また化けもの！

浄瑠璃。「と立ちあがり、ふたゝびあくる障子のもと、民子はかほをうち見あげ。

民子。吾良さま。

桂。やァ、民子！よくわれをあざむいたなァ！

民子。あれえい、おなさけない！〔肩を斬られて、倒ふる。〕

桂。化けもの！

民子。あなた、民子で御坐んす。

桂。なにい、化けもの！

民子。あなた、お氣がちがひましたか？

桂。だまれ、人を—化けもの！

民子。民子で御坐んす。

桂。馬鹿にするな！

民子。すれゝ、あなた

桂。だまれ！

民子。はあゝ！

浄瑠璃。「わッと泣き出すそのこゑに、和尚はあはてゝいで來たり。

和尚。桂さん、何とです？

民子。和尚さま、どうぞ助けて！

和尚。や、お孃さま、斬られましたか！—桂さん、なぜお孃さまを？

浄瑠璃。「誘善またもいで來たり。

誘善。何とで御坐ります？—えゝッ！

〔誘善びッくり。桂は劒をすてゝがッくり倒ふれ、まるで氣ぬけたこなし。〕

和尚。桂さん、しッかりさッしゃれ。しッかりさしゃって、このわけ、これ、よくはなさッしゃれ。これ、桂さん〳〵。これ〳〵。—これァ、氣絶！—誘善、早やく水を。

誘善。はい。〔はいる。〕

和尚。お孃さま〳〵。—これァ、ふたりとも！早やく水が入る。誘善はまたぐづ〳〵して居らう。〔はいる〕

浄瑠璃。「うばたまのあやめもわかぬくらやみを子ゆゑにまよふおやごゝろ、照らすひかりもほの ぐらくたどりたどりてはせ來たる。

〔本釣鐘。向ふより、灯提をさげて定行夫婦。〕

瀧子。あれ〳〵、この夜ふけて、あかりがもれて居る。

定行。うれしや、むすめは……

兩人。居てくれたか！

〔舞台に來るまでに、和尚誘善、水を以てもどり、和尚は桂、誘善は民子を介抱する。〕

和尚。桂さん〳〵！

誘善。お孃さまァ！

和尚。桂さまァ！

誘善。お孃さまァ！

定行。むすめでァないか？

誘善。旦那さま。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

和尚。　桂さまァ！

瀧子。　え、どうしました？—えゝッ、なさけ無い、斬られたわいなァ！

〔民子にすがりつく。〕

定行。　まァ、しづかにいたせ。

和尚。　やァ、森さま御夫婦！大變なとが出來ました。

定行。　すれャ、桂も？

和尚。　何により、お孃さまを。—桂さまァ！

瀧子。　民子よう！

和尚。　おゝい！〔桂氣づく。〕

定行。　民子よう！

和尚。　お氣がつきましたか？

瀧子。　民子よう！

民子。　〔氣ついて、なほ母の膝〕はゝさま

瀧子。　これ、氣がついたか？

民子。　はい、たしかで御坐ります。—おゝ、父うへ樣までが？

定行。　桂、これャどうしたのだ？

和尚。　さァ、しッかりさッしャれ。

淨瑠理。「はげまされて桂吾艮、身を起こしてまたひらふかたへのつるぎつらづえに。

桂。　これさ、民子！いま化けたは貴さまであッたゞらう？

民子。　すれさ、あなた？

桂。　化けたでャないか？

和尚。　何にをいはッしャる、桂さん？

誘眷。　それャ、わたしもいま幽靈見まして、桂さんに話し、寐たとこ。桂さんは見ちがへて、—お孃さまでャァ御坐りません。

和尚。　むゝ、幽靈が出た？

定行。　して、それと見ちがへて、……

瀧子。　このむすめを斬ッたと？

定行。　あゝ、なさけ無い！

定、瀧。　なさけない！

瀧子。　なさけないはいのう！〔また民子を抱く。〕

和尚。　お孃さま、まァ、どうしたお氣の毒で御坐りませう？

淨瑠理。「いはれて民子は身を起こす、からだかた手に苦をさゝへ。

民子。　いえ、和尚さま、わたしは、どうせ、死なねばならぬ身。桂さまのお手にて死ぬのは、わたしの本もで御坐ります。父うへさまや母さまの仰せにそむき、こゝまでかくれてまゐりましたも、そのつみは覺悟のうへ。いま聽いて居ましたおひとり言がほんとで、幽靈が出ましたを、それと見ちがへられたわたしは、却ッてこれがおうれしう存じますわいなァ。—吾艮さま、わたしャこれがおなごり。とてものと、一ことまゐりましたねがひを、どうぞ、お聽きなされてくださりませいなァ。

淨瑠理。「お聽きなさッてくださんせ。せめてあなたとそはれずも、父母のいかりのしづまらば、またわがいへに立ち歸へり、御身のすがたをがませてくださるも

のを、この無殘！うらみはさら〳〵なけれども、おいたはしきはおこゝろの解けぬかつらのふし〳〵に。

あなたがいつも〳〵お苦るしみあそばすのも、みなわたしのちちはゝゆゑと存じますれば。どうぞ、早やくあのかたき、―たとへ病院は出たとのことなれど、かげを隱くさぬうち、―どうぞ、早やくあのかたき、あの宮城を討ち取ッて、ちゝうへさまや母さまと、もとのやうによいあいだにおなりなされてくださりませいなァ。

浄瑠理。「さすがをんなのあさはかも、聽いて桂はつッ立ちあがり。萬感むねに立ちふさがり、そろり〳〵と氣はかはり。

〔うすどろ、桂、氣のかはッて來るこなし。〕

桂。やァ、民子、よくいふたぞ！なんぢ死なして桂家、われつがねば、以後斷絕。おやのかたきはある、またいへは絕ッてしまえん。たとへ、社會の大法をやぶり脫けて、地獄まで落とさるゝともあれ！われはうらみを果たして、なほ生きて居る。―これ、見よ！このつるぎが宮城を斬るつるぎだ。

浄瑠理。「鮮血淋漓、こほりのやいば！冴えゆく民子は一とたびよろこび。

民子。これで、わたしゃしづかに眠むられますわいなァ。

和尚。いや、桂さん、かたきを急に取らッしゃるとな？

定行。桂、ゆるしてくれ。かたきを討て〳〵といッたは、いのちおしんで民子とそふてくれるかとばかり。

瀧子。それを民子はほんとに、さぞうらめしうおもッたろ。

桂。いや、かたきも取る、家も繼く。

和尚。それはまた、出來ぬことで御坐るぞ。

瀧子。これ、民子！もういきがきれたか？

定行。えゝッ！もう、きれたか、民子！

和尚。きれましたか？

〔定行も和尚も、民子のそばにあつまる。〕

瀧子。これ、もう、一とこと！

定、瀧。民子よう！

和尚。お孃さまァ！

誘善。お孃さまはもう死にましたのか？

定、瀧。民子よう！

浄瑠理。「よべどさけべど、なきがらの答ふることもあらばこそ！

瀧子。吾良さま、聽こえませぬわいなァ！

桂。宮城、どこ行ッた？くそッ！

和尚。これ、桂さん、どこへ御坐る？

〔桂、劔を以ッたまゝ、下手へ下りるを、和尚、つゞいて下りて、之をとめる。本釣鐘。〕

和尚。必らずお氣をしづめて〔木のかしら〕

定行。狂るふまいぞ。

〔うしろより一人のぞく、見えよろしく、幕。〕

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

◎四幕目。

(一) 森子爵門前の場。

〔本舞臺通してねり屛、上手へよッて門、石段。幕あくと、新聞配達りんを鳴らして通り過ぎる。門をあけてお松、氣の落ちつかぬこなし。〕

お松。 お孃さまはどこへお行きあそばしたやら、もう、新聞も來るころだのに？あまりといへばお氣のみじかい、父うへさまや母さまのお目をしのび、夜をかにおであそばすとは。若しものとがあッたなら、〔石段下りる〕あゝ、心配でならぬ。手わけをして出た人も、まだ誰れももどらぬは、堀へでもおはまりなさりはせぬか、いまごろまで、どこを探がして御坐るやら？旦那さまや奥さまは、なほ更らおしかりあそばすものを。

〔段をあがる、上手より、提灯をさげて家令澤田辰之進。〕

澤田。 澤田さんで御坐りますか

お松。 おゝ、歸いりましたか？

澤田。 いえ〳〵。どこにもおいでなさりませぬか

お松。 わたくしは、もう、そこの堀ッぱたから、向ふの松の木の近處、それからまだ、方々こゝろあたりを探がしましたが、下駄一とつ見つかりません。若しやはだしでゞも飛び出したのかとおもひますが、――まァ、大淨寺の方はどうですか知らん。

お松。 それで御坐りますが、まァ、おいでなさればよろしう御坐りますが、――どうあそばして御坐るやら？

澤田。 どうも、安心が出來ません。もういち度、うちの井戸でも探がして見ませう。

お松。 もう、お歸いりあそばしさうなもの。

〔澤田入る、お松また下りる。〕

一向もどる樣子もない。〔またあがりつゝ〕若しや大淨寺に御坐ッたゆゑ、夜があけてからお歸いりのとやら？

〔下手より、桂と寺男莊平、民子を乘せた轝のあと先きをかつぎ、定行夫婦提灯をさげて、いで來たる。〕

お孃さまで御坐りますか？

莊平。 へエ。

お松。 まァ、これで安心いたしました。――なぜ、そんなものに？

桂。 いや、お松、安心どころでャ無い。

お松。 えゝ、どうあそばしました？

瀧子。 まア、うちへは入ればわかる。

定行。 門をよくしめて來い。

お松。 かしこまりました。

〔お松あとに門をしめる。上手より、山口と入れずみ勘太。〕

山口。 おい、けふから、あいつのあとをつけて行くんだが、どうか、うまく行けばいゝが。

勘太。 行かねェでさ、あの千兩？

山口。 町醫になッた、宮城めが受け取りに行く、謚屋のかね、……

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

勘太。どこからどこまでもつきまとひ、……

山口。うばひ取らねャア、これェだのうらみはしけェせねェ。——けさ早やく出達するといふんだから、……

勘太。先づ行ッて、うちの樣子を。

兩人。さうだ。

〔兩人入る。鳥の笛にて、道具まはる。〕

(二)宮城町醫居宅の場。

〔本舞臺、上手書生部屋、下手玄關、淺見政信、旅荷物をこしらへて居る。〕

淺見。あゝ、睏むたい〳〵。こんなに早やく起こされてャア、目もたまるものでャアない。しかし、かう、赤木君の世話で、主人が病院につとめて居る時から、書生をしてヱるのだから、いまとなッてもまたお伴もせねャアならん。主人と一所に、けさ、信州地方へ出達するが、これは澁屋のむすめが婚姻の料にする金を、賴まれて、受け取りに行くのだといふが。かねがあるところでは、何にをするッて、倉の中を開らかんでも、ちョッと貸してあるのを取ッてくれャアまに合ふと、それでも大きいものだ。主人が辭職早々、かう立派な町醫になれたのも、澁屋から資本を出してもらッたんだから、すこしャアいやな用事も引き受けてやらねャアならんだらう。もう、おッつけ、時間だらうに、——早やく出達せねばならん。〔奥にて手をたゝく〕へえ。

〔淺見は入る。下手より、警察署長日高秀太郎、巡査一名玄關に來たる。〕

日高。賴む〳〵。〔淺見出る。〕ちョッと宮城君呼んでください。

淺見。えゝ、いまから旅立つところですが。

日高。それでもいゝから、ちョッと呼んでくれ。

淺見。はい。〔は入る、宮城出る。〕

宮城。日高君、そんなに早やく、どうしたんだ?

日高。急用がある。

宮城。急用? 僕はすぐ出發するが、まア、あがらんか?

日高。いや、あがるどころでャア無い、きみに出發の時間をのばしてもらッて、ちョッと行ッてもらいたいのだ。

宮城。どこい?

日高。撿屍だ。いま、大淨寺に人殺ろしがあると訴たへて來たものがあッて、……

宮城。人殺ろし?

日高。行ッて見たら、早や、斬られたものは運こんで行かれたから、その運こんで行ッた先きまで行ッてくれ。

宮城。どこまで?

日高。森子爵のやしきだ。

宮城。誰れが殺ろされた?

日高。あすこのむすめだといふが。

宮城。えゝ、誰れに?

日高。誰れか知れゝャア、はじめからさわがない。

宮城。〔おも入れ〕子爵のむすめが、大淨寺で? それでャア桂が——いや、日高君、僕ァ行けない。

日高。どうして？
宮城。どうしたッて、きみ、いま出るところでャァ無いか？
日高。なァに、汽車なら、次ぎので行けャァよからう？
宮城。しかし、都合があるからね。
日高。都合たッて、きみ、まァ、行ってくれ〳〵。
宮城。それャァ、行ッたッて、いゝやうなものだが。
日高。そんなら、行き給へ。早く〳〵。
宮城。それでャァ、ちョッと待ッてくれ。〔は入る〕
日高。あの和尙のいひやうが、すこし瞬昧だねェ？
巡査。何んだか、いひにくさうにして居ました。
日高。行ッた樣子では、もういち度取りしらべて見らう。
巡査。それがよろしう御坐いませう。
〔宮城出て來る〕
宮城。さァ、行きませう。
日高。早やく行かねャァ。
〔宮城、淺見のおろすはき物をはく。〕
淺見。行ッておいでなさい。〔下女たばこ入れを以ッて出て來る。〕
下女。たばこ入れをおわすれなすッて。
宮城。さうであッた。〔受け取る。〕
宮城。さァ、行かう。
下女。いッていらッしャいまし。
〔宮城、日高、巡査、下手へは入る。〕
下女。人殺ろしがあッたといふんですか？
淺見。さうだ。

下女。折角早やく起きて、御膳をたいたり、無駄ぼねつかッた。まァ、臺どころでやすみませう。
〔下女入る、淺見もさへもどる。下手より山口と勘太。〕
山口。おい、こゝだが、手めェ行ッて樣子ゥ見て來ねェ。
勘太。よし、わかつた。〔玄關に來て、うろ〳〵〕御免なせェ〳〵。
淺見。〔出て來て〕何に用です？
勘太。へェ、先生御ぜェ宅でげすか？
淺見。いま人殺ろしがあッて、撿屍に行ッて、留守だ。
勘太。お留守でげすか？ それでャァ、こッちものばしませう。
淺見。何にをのばす？
勘太。へェ、出達を—いや、病氣を見てもらいてェのでげすか。
淺見。そんなら、先生は歸いれば、ぢき信州の方へ、用事があッて出發するから、いま見てやらう。
勘太。とても、書生さんでャァ駄目です。
淺見。何んだ？
勘太。いや、これでわかりました。
〔勘太、山口の居るところまで來て、何にか示し合はして、は入る〕
淺見。いや、仕かたが無い〔本のかしら〕やつだわい。
〔道具まはる〕

(三) 森子爵門前の場。

〔舞臺もさへもどッて、門前の場、男の甚六平助二人、掃除をして居る。〕

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

甚六。 おい、平助、ゆふべのさはぎは何んでヤッたのっ

平助。 おれも知らんが、お孃さんが居なくなッたとかで、旦那さんから奥さん迄が、方々探がしに行かしャッたんだとよ。

甚六。 それで、あの臺に乘せて來たんだな。

平助 さうとも。

甚六。 それだッて、まア、なぜあんなものに乘せて來たんじァ？

平助。 おらァ知らん。志かし、まア、奥では大さはぎだ。〔また掃除して居るさ、下手より宮城、日高、巡査、門内には入る。〕

甚六。 それ見よ、お役人さまが來たり。

平助。 これさ、甚六たゞごとでヤァ〔木のかしら〕

兩人。 あるまいぞ。〔掃除する見えにて、道具まはる。〕

(四) 森邸内民子撿屍の場。

〔本舞臺すべて邸の一室、よきところに屏風、民子を寐かし、枕もとに瀧子、桂、お松。〕

お松。 吾良さまとしたとが、どうお狂るひあそばして、ほんに、まア、おいたはしい、お孃さまがこの無殘？どこいおいであそはしてもおつき申したわたしは、おうらめしう存じますわいな。

桂。 民子、ゆるしてくれよ、民子、決して殺ろす氣でない。おやの遺言に從たがひ、桂家つがしてあッたに。あやまッたぞ、民子。許してくれ、あやまッた。このやさしいくちもと、もう、この世でわらはぬか？〔一心に接吻。〕

瀧子。 お松、いつまで泣いても、もう、仕かたが無いわ。いまに出入りの醫者が來たら、病氣で死んだ體にして、どうぞこと無くすませたい。旦那さまはどうあそはしてか、見て來てたも。

お松。 はい。〔立たんさする。〕

定行。 〔奥にて〕いや、來るにおよばん。〔いで來たる〕も早や、病氣もいつはれん。早や警察署に知れて、役人が來たぞ。

瀧子。 えゝッ！そんなら、あの、知れまして？

定行。 近處のものが立ち聽いて、ぢき訴たへ出たさうだが。

瀧子。 それでは、いま、吾良は取られますか？

定行。 それだが、何にも心配はいたすな。うまく、それはよ無く、すますつもりだ。――桂、こゝをのいて居れ、早やう。

桂。 民子、ゆるしてくれ。

瀧子。 早やくおのき。

定行。 これさ、吾良、こゝへ出て來てはならんぞ。〔桂入る。〕から知れたうへは、もう、吾良を助けるばかりだ。あれをうまさ、こと無くすまさうには、まア、民子があれへ志のび行く途中、何ものか賊に斬られたとして見ろ。それで、何にも、このつみはあれにかゝらう氣づかひはあるまい。

瀧子。 仰せの通り、たゞ、斬られたものを入れて、介抱して居たばかり。

お松。 どうぞ、それですみますれば、よろしいもの。

定行。 どうか、桂は助すけてやりたい。〔民子の死がほを見て〕この

かほで、もうものいはぬか？

瀧子。このくちもとわいのう！おやとおもへばこそ、うらみもいふてくれた。子とおもへばこそ、またとめもした。このやうに殺ろそとは、まァ、天道さま！お情けない、ゆめにも存じませなんだわいなァ！〔屍にすがりつく。〕これ、民子、どうぞうらんでたもんな、うらんでたもんな〳〵よ！

定行。瀧子、お松、もう泣くな。死んだものは、もう、いつまで立ッても歸いらん。さァ、早やくそこらをかたづけろ。

お松。はい。〔立ッて、あたりをかたづける。〕

定行。役人が來ても、必らず見ぐるしいざまを見せてはならんぞ。

瀧子。こゝにまだ血のあとが、これ、くびに。—このほそいくびすぢわ！

〔くちでハンケチをぬらして、えをふく。奥より、家令澤田辰之進。〕

澤田。もう、通してよろしう御座いますか？

定行。通していゝ。

澤田。左樣ですか？すぐ通しますから。

〔澤田入る。奥より、家令につゞいて日高警察署長、巡査一名、宮城町醫。〕

日高。えゝ、わたくしは警察署長、日高秀太郎と申します。先刻、あるものゝ訴たへで、大淨寺に人殺ろしがあると承はり、早速まゐりましたところ。和尙のはなしでは、このあなたの令嬢が寺へおいでの途中で、何ものかにお斬られなされたのと。

定行。それで御坐る。何ものか、その途中で、この通り斬り殺ろした次第。

日高。それで、わたくしどもの役目として、たゞいま、撿屍にまゐりまして御坐います。

定行。それは御大儀。

瀧子。みなさま、御苦勞に存じまする。

お松。どうぞ、お敷きあそばせ。

日高。はい。—えゝ、して、お斬られなさッた傷といふはどんなになッて居ります？

定行。そのかたな傷で、ひだりの肩よりずッとみぎのあばらへかけて。

日高。およそいつごろで御坐います?

定行。二時ごろですか？〔日高手帳へひかへる〕

宮城。先づ、役目をすませばどうです？

日高。それでは、いち度拜見を。〔撿屍にかゝる。〕

瀧子。この通りで御坐ります。

日高。ひどくやられましたものですなァ？

瀧子。お松、かなだらひに水を。

お松。はい。〔入る、宮城撿し終ッて、坐にもどる。〕

定行。澤田、すゞりと紙。

澤田。かしこまりました。〔入る。〕

宮城。いかにも深かくやられましたものです。

〔お松水を以ッてもどる、宮城手をあらふ。〕

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

定行。何んとおッしゃりますか、お名は？
　民子と申します。
　〔宮城、澤田の以ッて來たすゞりて撿屍狀をしたゝめる。〕

日高。いきはぢき絕えましたか？

定行。間も無く絕えました。

瀧子。まだいひたいこともあッたであらうに、さぞ殘念なことで御坐りませう。

日高。二時ごろに斬られて、それから、こゝへお運びなされた手つゞきは？

宮城。〔したゝめ終はッて〕これはきみにお渡し申す。

日高。これで、宮城君、歸いッていゝ、いそぐだらうから。

瀧子。えゝ、あなたが宮城？

定行。いや、あなたが慈善病院の宮城さんか？

宮城。左樣で御坐い、わたくしは宮城純と申します。病院の方はこのごろよしまして、町醫をやッて居ります。

瀧子。あの、あなたがまち醫を

宮城。左樣で御坐います。

定行。なァに、それはなかなか結構。かねて御姓名は聞いて居りました。

宮城。わたくしも、いまは大淨寺に御坐る桂吾良君はよく存じて居ります。

瀧子。くッ！〔無念のこなし〕

定行。瀧子、向ふへ行ッて、あさの仕たくをさせて置け。

お松。それャ、もう、をなどもがいたして居ります。

定行。向ふへ行ッて居れ、瀧子。

瀧子。はい。〔立つ。〕おもへばにくい……

定行。さゝ、早やく。〔瀧子は入る。〕いや、もう、飛んだ難儀に會ひ、がッかりいたして。

宮城。さぞ、御愁傷で御坐いませう。わたくしはこれから用事が御坐いまして、すこし田舍へ出ますから。

定行。それは、どこへ行くのかね？

宮城。信州地方へ。

定行。それはなかなか。

宮城。御免を。

日高。手まをかけて、失敬。
　〔宮城立つ、奥より桂。〕

桂。宮城、待て！これャ、おやのかたき！

宮城。何んだと？

定行。桂、何にをいふ？

桂。殺ろさずに置くものか？ちョッと貸せ。〔巡査のさあべるを拔かんとする。〕

巡査。何にをなさる？〔之を押へる。〕

定行。桂！

桂。そんなら、これを。〔また日高のを取らんとする。〕

定行。氣ちがひめ、何にをさわぐ？〔桂を捕らへる。〕

お松。吾良さま？

澤田。桂さん、こちらへ御坐れ。
　〔家令桂をつれて行かんとする、奥より瀧子。〕

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

瀧子。吾良さま、まア、どうあそばした、血相かへて？さア、これ、奥へ御坐れ。〔瀧子、桂をつれては入る。〕
定行。御無禮をいたしました、宮城さん、すこし氣がちがッて居りますから。
宮城。いや、どういたしまして。――御免を。
お松。御苦勞で御坐りました。
澤田。御苦勞でした。〔宮城、家令に送くられては入る。〕
定行。あれはすこし氣がちがッて居りますから、貴官のまへもはゞからず、無禮をいたしました。
日高。いまのかたが大淨寺に居られたので御坐いますか？
定行。いかにも。
日高。何んと申されますか？
定行。桂吾良、身どものをひで御坐います。
日高。〔また手帳にひかへる。〕えゝ、して、どういふ工合ひになされて、ぢきにこゝへお運こびなされました？
定行。それは、われ〳〵夫婦があとを追ふて行ッたから、臺にのせてかつがして來た次第。
日高。何んのわけで、夜るひとり出られました？
定行。もとより分別知らぬむすめの不處存、いまの者を慕たッて行ッたとおもはれます。
日高。それでは、いまのかたのところへしのんで行く途中で、何ものかに斷られたといふわけで御坐いますな？
定行。左樣で御坐る。〔澤田もどる。〕
日高。去かし、大淨寺の椽がはに澤山血のついたあとが御坐いますし、またいまのかたの擧動を見ますれば、どうもほかのものとは見られません。
定行。いや、それは。あれへつれてまゐって、とも〳〵に介抱したので御坐る。
日高。去かし、わたくしの方では、役目として、まだうたがひもあり、いづれ、なほ取りしらべますから、たゞいまは、これで御免被ふります。
定行。左樣で御坐るか、――これは御大儀。
お松。御苦勞で御坐りました。
澤田。御大儀で御坐ひました。
〔日高巡査、家令につれられては入る。〕
定行。〔おも入れ〕これでは、桂はもうのがれられぬか！
お松。どうぞ、桂さまつみに落ちねばよろしう御坐りますが。
〔奧より瀧子、つゞいて澤田。〕
瀧子。吾良が急にどこかへ飛び出して行きました。
定行。それでァ、宮城のあとを追ッたに相違無い。――どうせつみに落ちればとて、澤田、早やく大淨寺へ行って、和尚に頼のんで引もどさせよ。
澤田。かしこまりました。〔は入る〕
お松。奧さま、吾良さまはあぶなう御坐りますぞ。
瀧子。えゝ、罪に落ちねばならぬと？
定行。なさけ無いが、助かるとは出來まい。
瀧、松。はあゝ！
〔見えよろしく、幕。〕

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎大詰。

林中夜半の場。その一。

〔本舞臺、いち面のくろ幕。本釣鐘にて、上手より宮城と書生淺見、車二輛。〕

宮城。　これさ、くるま屋！

車夫一。　へェ。〔とまる〕

宮城。　何にを、また、ぐづぐ〳〵するんだい？こんなところで夜るになるつもりでなかッた。

淺見。　しかも、月があるに隱くれて、みちの暗らいと見ろ。

宮城。　いそげ。いそげといふんだ！

車夫一。　は、、！誰れもさういそげるものァ御ぜェやせん。

車夫二。　それに、大事の御用がすみ、おけェりなさるみちだから。

車夫一。　旦那、安心なせェませ、もう、しめたもんで御ぜェやす。

宮城。　何んだと？

車夫二。　いやさ、しめたとァ、どろ棒に會ッたときでさァ。

〔下手へ引いては入る。上手より桂、劔を提げて、うか〳〵ひく〳〵、下手へは入る。あと、幕切ッて落とす。〕

その二。

〔本舞臺、いち面杉の林の畔。賊三人火をもやして居り、眞中の一人は深かくかほをつゝみ、かたわらの二人は喧嘩のこなし。〕

一。　手めェら、もう喧嘩ァよしねェといふに、つまらねェ。

二。　おやかたがそんなといへァ、とひつッなほのッて來やァがる。

三。　何んだ！手めェが子どものやうにあまへァがるんだ。

二。　くそ、子ども？べら棒な、おぬしャア、して、馬鹿か、道理も知らねェ？

三。　手めェが道理を知らねェんだ。どろ棒だッて、このくれェのとァ知らねェやつァねェぞ。さけェ食らやァがッて、割りめェよこさねェやつァ天下に手めェひとりだ。

二。　何に、誰れがよこさねェか？かねがねェから、待ッてくれェていふんだ。

三。　待つにもほどがあらァ。食ッてャア寐、飲んでャア寐、手めェ見たやうななまけものァ、どこにもねェぞ。

二。　何んだい、これャ！〔三のむなぐらをつかむ。〕

三。　手めェおれをどうするんだい？

二。　なげ飛ばすんだい。

三。　なげられゝャア、なげて見ろ。〔つかみ合ふ。〕

一。　よせッてャア、よさねェか。手めェらが喧嘩ァして何んの役に立つんだ？

二。　おやかた。

三。　ほッときねェ。

一。　ふゝ、何んだ、一兩や三兩、べら棒な！よせ。おいらァけェしてやらァ。〔二人とまる。〕

二。　そんなら、おやかた、賴みますぞ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

三。 おれだッて欲しいとァねェが、こいつァいめェましいやつ！

一。 いめェましいもねェこッた。——さァ、やらァ〔かれを投げ出す。〕

二。 さァ、やらァ。

三。 手めェんでァねェぞ。——おやかた、ありがたう〔ひらひ取る。〕

一。 まァ、おいらが手めェらのおや分であるあいだは、不滿足にァさせねェ。

二。 おやかたァ豪氣だわい。

三。 さすがァ、いち度軍醫をやッて見たいけあらァ。

一。 おいらだッて、手めェたちのおや分で、毎晩〳〵こんなことをしてェれァ、こんな氣樂な商べェはねェが。考げェて見れァ、軍醫で正直にやッてた方がよかッたか知れねェ。四海同胞といふ今日に、まだ子どもや婆々ァの金着をするのァ何んでもねェが。よそのおやぢやかゝァを殺ろしたり、軍人が敵を斬るのとァちがッて、——それでも、むごいに、——何んと、まァ、こちとは殘酷な、無情もんだらう？人間と生れて、畜生道を踏んでるんだ。あの世でァ、地獄のかまァあけて待ッてるだらうよ。おまけに、いまでも捕られゝァ、すぐくびァねェんだ。——おぼつかねェつなはたりだ。

二。 おやかたのいふ通りだ、つかめェられてァそれッきりよ。

三。 のがれまはるがかるわざさ。

一。 心ぺェするにァ…………

みな。 およばんて。〔下手より入れずみ勘太。〕

一。 勘太、まだこねェか？

勘太。 おやかた、まだ樣子ァねェや。

二。 早やくあみにかゝれァよからうに、めんどくせェ。

勘太。 人を待つといふものァ、そんなに限ぎらず、待ち遠しい。

三。 まァ、あたれ。

一。 あいつなんぞァ殺ろしてもいゝやつだ。

勘太。 志かし、なか〳〵由斷は出來ねェぞ。

一。 くるま屋せェうまく引ッぱッて來れァ、もうしめたもんさ。

〔本釣鐘、桂、劍をぬいて、うしろの杉のかげよりちョッとのぞく。〕

二。 來たぞ〳〵。

三。 來た〳〵。

勘太。 くるまのおとだ。

一。 まァ、あたッて居れ。

〔向ふ揚幕より宮城と淺見、車二輛、ずッと、舞臺へ引かれ來たる。〕

車夫一。 旦那、こゝでちョッとやすみませう。

宮城。 いや、もッと先きまで行け。

車夫二。 旦那、折角こゝまで引ッぱッて來たのでさァ。

宮城。 いや、さうたび〳〵やすまれては、こッちが困まる。

勘太。 なァに、そッちの困まりァこッちでふさぎやす。まァ、やすまッせェ。

二、三。 あたらッせェ。

車夫一。 待ち遠だッたらう。

車夫二。 おふたりさん、さァ、こちらへ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

宮城。〔車をおりる。〕どうぞ、志ばらく。
勘太。暫らくでも、何んでも。さァ、あたらッせェ。
宮城。はァ。
二。さァ、こゝい來なせェ。
宮城。はァ。
三。こっちがいゝ、さァ。
宮城。はァ。
勘太。くるま屋さん、御苦勞だッた。
二、三。さァ、こゝい。
車夫一。御免なせェ。〔宮城、淺見、みな火のまはりにしゃがむ。〕都合よく、月が照ッて來たねェ。
車夫二。あんまり馬鹿にしてやるな、くらいでャァねェか？
勘太。遠慮にャァおよばん、どうせおめェさんは—いや、おめェさん、どこいおけェりだ？
宮城。わたくしはこの先きのむらまで。
勘太。何んの用で？
宮城。なァに、かねは澤山こゝにあるわい。〔以ッて居るかばんを示す。〕
勘太。これャァ正ぢきだ、すこしかりやせうか？
車夫一。旦那、くるま賃くだせェ、これで御免破ふりやせう。
宮城。どろ棒に賃も入るもんか？
車夫二。うゝ、ふんだくれといふんか？
宮城。知れたとさ。

一。だまれ、宮城！おのれャァ、よもや忘すれめェ？〔かぶり物を取る。〕
宮城。やァ、山口？
山口。うゝ、山口だ。よく聽け。貴さまがはじめ、桂のこひ人をぬすみかねて、〔この時、桂またのぞく。〕浪子に毒を調合してのまさせ。飲ましたおれが邪魔になるから、ぢき追ひ出し、おのれャァ平氣の平左衞門。して、赤木のこひ人雪子をよこ取らん爲め、また乘せた澁屋夫婦。おれが志のび込んで居て、聽いたとァ知ッて居ろう。貴さまはこひ、おれャァかね、一所に出あッたそのとき、不意をうたれてにげャァしたが、いまは決してにげもせん、にがしもせん。さァ、宮城、貴さまが持つ澁屋の雪子赤木が婚姻料、千兩そろへて出せい。
宮城。それでャァ、これをまへから………
勘太。知らねェでさ？
淺見。どうぞ、わたしはおかねは御坐りませぬが、まァ、どうぞ、この羽織を出します。いのちだけは、どうぞ〳〵、お助けくださりませ。〔羽織をぬいで、出す。〕
勘太。馬鹿野郎！貴さまなぞにャァ、用事ァねェや、うせャァがれ。—こんなものァけェしてやらァ。〔羽織を投げかへす。〕
淺見。あゝ、ありがたう御坐りまする。おどろ棒さま、ありがたう御坐りまする。〔腰をぬかして、上手へは入る。〕
山口。これャ、宮城！世間は、みな、誰れもおどろ棒さまだ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

人のこひをぬすまんと、いのち取るのもどろ棒。いのちはいらん、かねせェ取ればいゝのもどろ棒。貴さまもどろ棒なら、おれもどろ棒。どこのどぶのどろか、どいつのぼろのぼろか知らねェ、いち度破ぶれたこゝろァおなじとだ。わかッたら、早やくかねを出してしまへ。

宮城。 貴さまにやるやうなかねは無い。〔かばんのかれ入れを出して、懐中する〕

山口。 さァ、ふんだくれ。

五人。 はだかになッてしまへ。〔五人かたなを差し出す。〕

宮城。 何にを、小僧め！

〔仕込みづえを抜いて、きッとなる。之より、宮城五人と立ちまはりよろしくあッて勘太を斬る。〕

勘太。 あゝッ！〔倒ふれる。〕

山口。 やア、宮城！

宮城。 何にを！〔また立ちまはり。〕

山口。 これさ、宮城！〔斬る。〕

宮城。 おのれ、山口！〔つゞひて立ちまはり。〕

山口。 これャ！〔宮城を斬り倒ふす。〕 宮城、どうじャ？

宮城。 なんぢ如きやつばらに斬られるのも、わが悪業つもる爲めか、殘念〳〵！

山口。 〔落さしてあるかれ入れを拾ふて、にッこり。〕これせェ取れャア、いのちはばらすんでャアなかッた。—宮城、おれを恨らんで、六道のつぢにまよッて待ッて居れ。

宮城。 これャ山口！

山口。 苦るしいか！

宮城。 たとへいまにがすも、おのれおなじ大あく人。いまにあみにかゝッたら、そのときこそ、わが魂魄まといついたとおもへよ。

山口。 うン、そのときにャア お禮申す。—どれ、お別れとしやうか？

〔行かんとするとき、桂おどり出る。〕

桂。 山口、待て！

山口。 や、南無三！

桂。 卑恐な、これャ！

〔山口のにぐるを斬る、同時にかれに斬りかへさる。〕

山口。 〔例ふれて〕誰れだ、おれを斬ッたは？

桂。 おのれ、にがすものか？

宮城。 山口、觀念したか？

山口。 しもた！おのれ、このかね、さア、そのつらに塗りつけェ！

〔桂にかれ入れを投げつける。〕

桂。 これさ、宮城！これさ、山口！いづれわかぬ大罪人！桂吾員忘すれたか？

兩人。 や！

桂。 おやのかたき討たん爲め、宮城、なんぢ待ッたところ、また浪子のかたきづれ、山口にも逢うたとは、なんぢら運命のよく〳〵盡いたときと觀念せよ。

宮城。 南無阿彌陀佛！

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

山口。あゝ、しもた！〔兩人落ちる。〕

桂。あゝ、父う〳〵！父う〳〵！

〔桂劍を落さして、倒ふれる。本釣鐘。上手より、大淨寺の和尙、四人の死骸をすかし見、桂にいたってびっくり。〕

和尙。ひゃ！殺ろされたか、桂！―あなたもまたおなじう斬られまして？おそかった！―まだおいのち御坐りますか？桂さまァ〳〵！まだおいのち御坐りますか？おゝい〳〵！

〔この時、電氣の月光を照らす。〕

桂。や、和尙さん？〔氣づいて、兩手をつえに胴を起こす。〕

和尙。うれしや！まだおいのち御坐りまして、桂さん。

桂。よくも、まァ、來てくださった。―無念！殘念！この身がまた山口に斬られたとは知らなんだ、知らなんだ。くッ、ちェ！

和尙。森さま御夫婦にたのまれ、すぐあなたのおあとを追ふて來ましたも、桂さん、こゝでお目にかゝったが、も早や、わかれで御坐りますか、さぞ殘念、さぞ殘念で御坐りませう。

桂。この身死ねば、桂家はも早や斷絕。和尙さん、この、このつるぎはあなたに進じまする。〔拾ろッて渡たす。〕またこれは〔そばのかね入れを取ろ〕いま山口ぬすまんといたしたもの、このぬしは溢屋。どうぞ、溢屋までとゞけてくださりませ。〔渡たす。〕もう、いかん、和尙さん。

和尙。桂さん、必らずおまよひなさるなよ。

桂。和尙さま！〔本釣鐘。〕

和尙。桂さま！

桂。これが最後で〔木のかしら〕

兩人。御坐ります。

〔見えよろしく、幕。〕

（大尾）

正誤。

一頁、上段、二十行目、ト書のうち、「浪子、倚子を」云々より「居竦むろ」迄を省き、「浪子明いて居ろ窓のもさなる倚子にもたれろ」さ改む。

五頁上段四行目「まア、何んであッても」より道具廻ろ迄を省き、左の如く改む

浪子。まァかういッて來ましたの。〔手紙を出して、之を讀む〕「明後日は父の十周忌に付、墓參致すつもりに候問、御身も休暇を取ッて、一所に御つき合下されてはいかゞに候や。御話し申度事はいろ〳〵有之候。桂吾頁拜。上田浪子様。」

雪子。わたしも行きたいわ。

浪子。そんなに行かれますものか？〔またうめく聲〕あれ、苦ろしさうに。早やく行ッてやりませう。また、あさで。〔立つ。〕

雪子。わたしも見まはッて來ますから。

〔木のかしら、兩人は入ろ。またうめく聲にて、道具廻はろ。〕

十三頁下段十二行目「それャア、あなた」より次行「聽かしてくださいな」迄を省き、「それやァ、さうですさも。誰れだッて、自分がまごゝろが無けれャア、おもひやりもありませんさも。」さ改む

同十七行目「わたしャさうおもッて」より十九行目「仕かたがありませんから」迄を省き、「わたしもあなたにすゝめられて、して居ますが、毎日せわしいばかりで。それで部屋い歸いッて書物を見ても、つひ竦むたくなッて。」さ改む

二十二頁下段七行目「手紙を出し」云々より十行目「おも入れ」迄を畧し、「手紙を出し、之を默讀して、おも入れ」さ改む

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

著者	書名	冊	正價	郵稅
鈴木弘恭大人述	百人一首講義	全	金二拾八錢	金四錢
同	文法口授	全	金拾二錢	金二錢
若松賤子譯	小公子	上	金二拾八錢	金八錢
櫻井明石君重譯	希臘孝子 腓立比物語	全	金三拾五錢	金四錢
小此木、布川同著	俳諧史傳	全	金三拾錢	金四錢
池袋清風大人著	淺瀨の波	第一編 第二編	金二拾八錢 金三拾二錢	金四錢宛
星野愼之輔君編	應用植物編	全	金四拾錢	金六錢
同	昆虫植物金石 採集法	全	金八錢	金二錢

著者	書名	冊	正價	郵稅
島田三郎植木枝盛同著	廢娼演說	全	金五錢	金二錢
島田三郎巖本善治同著	公娼可滅	全	金四錢	金二錢
	透谷集		金三拾八錢	
松山高吉君著	邦文學	全	金拾二錢	
鈴木弘恭大人述	雅俗諸體 作文口授	全	金拾七錢	金四錢
橫山雅男君著	婚姻論	全	金拾六錢	金四錢
船越鼎太郎君著	產婦小兒 攝生法	全	金拾錢	金二錢

發賣所　女學雜誌社書店

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

鈴木弘恭大人講述

第六版 百人一首講義 （附錄小倉てびき）

正價金廿八錢
郵税四錢

御高評を得たる百人一首注文いよ〳〵多く第四版品切に成りたれば玆に第五版を印行し、且つ「小倉てびき」と云ふ、極めて便利の見出を添ゆ、之によりて、百人一首それ〳〵の歌の句の在り處、意味、よみ手などを直ちに見出すことを得る至極重寶なり。

透谷集

菊版美本肖像入凡二百七十頁
十月七日發賣定價三十八錢

右は故北村透谷子が遺稿斷篇の散逸せんことを惜みて一冊子となしたるものなり。子が轗軻窮愁の短生涯に於て筆にしたるものは悉く網羅蒐集したれば、子が平生の素志を惜む人はこの小集を愛讀せらるゝに吝ならざるべし。この冊子厭世詩家と女性の一文に始まりて蝶の歌に畢る、心機妙變の論あり、油地獄の評あり、歌念佛の評あり、三日の幻境あり、情熱の辭あり、哀詞の序あり、其他國民の思想を論し、富獄の詩神を想ひ、情死をあはれみ、ゆきだをれを悲しみ、螢を歌ふ。其他清深の文字少なからず。

發賣所 神田表神保町六番地 女學雜誌社書店

小此木信一郎
布川靜淵 合著

俳諧史傳 全

和裝美本定價三十錢郵税四錢

◉小此木、布川兩氏の著『俳諧史傳』製本既成す。嘗て『城南評論』『評論』の紙上、多少の讀者をして其精細なる筆法に傾倒せしめたる兩三篇は、實に斯の書中の一部のみ。

◉思ふに、俳諧は我文學史上に、一大特殊の光明を煥發し、三百年の間、庶民の美妙なる想念を漾蕩せしめ、豪宕なる漢詩、優婉なる和歌以外、別に、幽玄、閑寂、悲壯、沈痛なる詩天地に逍遙せり。

◉俳諧は和歌に孕まれ、連歌に興り、松永貞德となりて、諧謔を擅にし、西山宗因となりて、奇巧好笑なる壇林の花を咲かしめ、更に、詩聖松尾芭蕉の大手腕をかつて、正風俳諧となり、平民的叙情短歌の面目を構成す

◉其源流に遡り、其發達を討ね、其推移を叙し、其變遷を記し、其特相を論じ、一讀の下、燦然として讀者の腦裡に斯の文學を活現せしむるものは、我『俳諧史傳』なり。

◉これを分てば俳人個々の傳記となり、これを聯ぬれば、一篇整然たる文學史をなす。逸事ありて、以て興趣を横溢せしめ、名句ありて、以て一誦、天地の幽遠なる秘奧に冥合せしむるに足らむ。

◉若しそれ、一字苟もせす、一筆輕々に下さず、言々證あり、句々據るところあり、而も文章、平易簡明、叙記、精到凱切なるや否やは、世の公論に一任せむのみ。世の俳諧を知らむとするの士、一本を座右に備へば、得るところ豈に鮮少ならむや。

發行所 東京神田表神保町六番地 女學雜誌社書店

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地秀英舍工場印刷(電話十九番)

發行所 東京府北豊島郡王子村下十條八戸廿一番地 女學雜誌社
編輯兼發行人 巖本善治 印刷人 堀口庄三